

ミツバチによる受粉が米ナスの 収量・品質に及ぼす影響

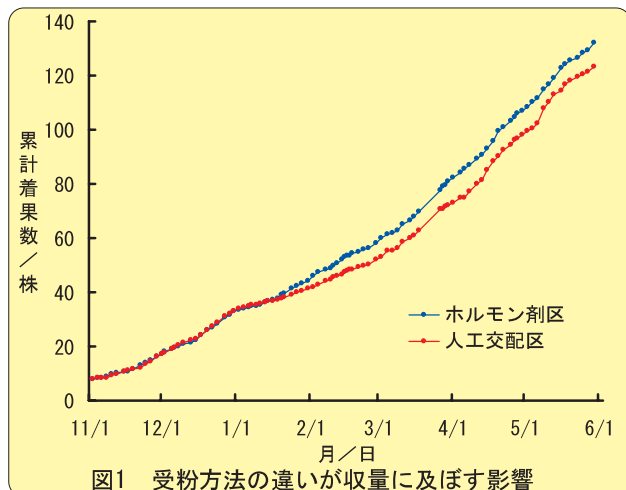


図1 受粉方法の違いが収量に及ぼす影響



図2 収穫後期に発生した赤果

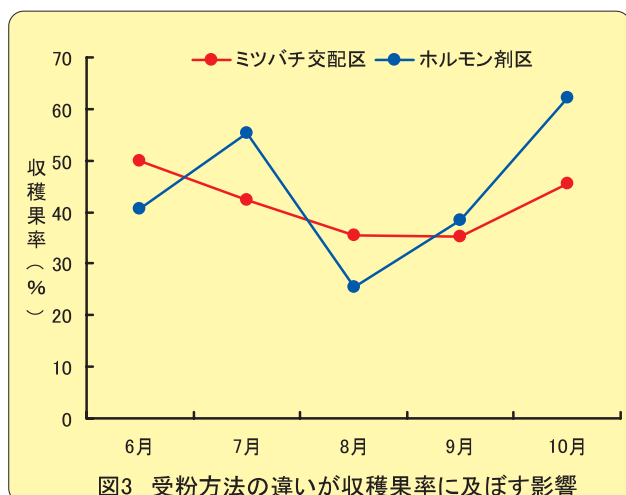


図3 受粉方法の違いが収穫果率に及ぼす影響

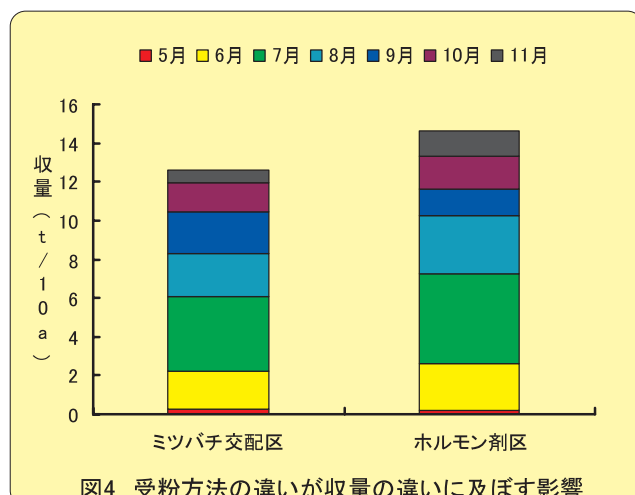


図4 受粉方法の違いが収量の違いに及ぼす影響

米ナスの促成栽培と雨よけ栽培において、ミツバチによる受粉が収量・品質に及ぼす影響を調査しました。

促成栽培ではミツバチによる受粉を想定して花粉を人工交配し、ホルモン剤による処理と比較しました。その結果、1月中旬まで両区の着果数は変わりませんでしたが、人工交配区では1月下旬から3月に着果数が少なくなり（図1）、4・5月には下級品（赤果等、図2）が多く発生し、上品収量が低下しました。

雨よけ栽培では、ミツバチを利用して、ホルモン剤による処理と比較をしました。

ミツバチ交配区では、収穫果率（全開花数のうち収穫できた果実の割合）は、ホルモン剤処理とほぼ同等（平均41%）でしたが（図3）、開花数が少なく、収量は14%減（図4）となりました。ミツバチによる交配では、収穫（収穫重：270～320 g）までの所要日数が3～4日長くなるため、着果負担が大きく、収量・品質に影響したものと考えられました。

このことから、ミツバチによる受粉を行う場合は、施肥量やかん水量の検討が必要と考えられました。

（環境システム開発室 安岡由紀 088-863-4913）

（山間試験部 齊藤格久 0887-72-0058）